

## 広本ヘーヴァジュラの神話

島 田 茂 樹

広本ヘーヴァジュラ（V・Vistṛpa-Hevajra）は現存しない。だが、現存するヘーヴァジュラ系タントラの多くは広本——三十二、三十一或は三十カルパ、五十万頌よりなるもの（*paṭhyes-paṇi-rdo-rje-ye-śes-rgya-msho-ḥbum-lha*）の存在を伝承する。即ち、これこそが根本タントラであり、現存の『*Dakini-vajrapañjara-tantra*』（A・北京版No.11）はそれを一カルパに要約した（*samkṣipta*）タントラ、また、われわれが狭義に於いて単に『ヘーヴァジュラ・タントラ』と認容する『*Hevajradakini-jālasamvara-tantra*』（B・Snellgrove 本・北京版No.10）別名『*Dvīkalpa*』はそれより二カルパを選択した（*udvīra*）タントラ、と云い、以下その根本タントラに付随する続、続々、釈、心（現存しない）、果、と称する一連のタントラ群（C・北京版No.12～15）が続き、*Hevajra-cycle*を形成するのである。本稿は、その恰も真話の如く言及されるVの非実在性を論証する、と共に、その神話を幻生せしめた思想的背景をも明確にせんとするものである。

先ず、上述の *Hevajra-cycle*〔それ自体が主張するそれ自体の〕系譜を前提とした場合、Bは後にVよりピックアップされ、独立して、B、という固有名称を持つ一つのタントラに至ったにせよ、当初はVの一部——三十二のうちの二カルパ——として創作されたものとされる以上、成立そのものはVと同時期の筈であり、然るに、V成立後に、それを待つて、Bを含むV全カルパを要約したとされるAよりは成立は先、ということになる。これを図式化すると、V（含B）↓A、となる。但し、AはVのダイジェスト版であるが故に、内容的にはVと相似である、ということも前提より考慮しておかなければならない。そして、これら前提より導き出された根本タントラの成立過程（仮定）の公式に従うならば、Aには当然Bの主たる思想体系が論及されていなければならぬ筈なのである。では、われわれの云う主たる思想体系とは何か。それは、四歓喜、四輪（Cでは六輪）三脈、四種灌頂、巡礼地などの顕著な教理を指すのである。何となれば、

これらは何れもBのみに説かれるものではなく、さらにCへと継承、整備される如く、サイクルに一貫して重要な位置を占めるところのものと見做されるからである。しかしながら、Aにはこれらは説かれていない。A・Bの、延いてはHevajra-cycle 全体系の最大公約数とも云うべき思想がAには無いのである(他方、AとBには共通箇所が無い訳ではなく、寧ろ、Vという同一の母から生じた直系の姉妹なるが故に共通部分は多く、殊に曼荼羅の諸尊や構成は等しい。ただ、B所説の全・二種曼荼羅が、A所説の全曼荼羅中の一部・二種曼荼羅に相応するだけではあるが……)。これは、 $\wedge A$ の云うVVには本来含まれるべきBが含まれていない、ということを示唆するものである。されば、 $\wedge A$ の云うVVと $\wedge B$ の云うVVとが全く $\wedge$ 別異のVV、乃至、AはBを知らなかった、つまり $\wedge A$ はBよりも先に成立したV、という前提・仮定に対する二つの矛盾点を指摘せざるを得ないのである。先ず前者の場合、 $\wedge A$ の云うVVであるが、AはVを要約したものであるから内容的には相似であり、故に、 $\wedge A$ の云うVVの全容を知るには $\wedge A$ そのもののVを検討すればよいことになる。それに対して、 $\wedge B$ の云うVVは、三十二カルパよりなるもの(そして、それより生ぜし二カルパがBである)とコロフォンにあるだけで、他に全カルパの内容、構成等、何ら具体的に言及されておらず、Vの全容を知ることとはできない。従って、A、B

広本ヘーヴァジュラの神話(島田)

両者のVを比較することもできず、第一の矛盾に解答を与えることは不可能である。次に後者の場合であるが、筆者は既に論じたので(『Ajarapahjara と Hevajra』『ヘーヴァジュラ曼荼羅の構成』)詳論は避けるが、即ち、AとBを文献学的に比較、対照するならば、明らかにAはBよりもprimitiveにして、しかも、BはAの影響化(五族平等→一族主体)に成立した公算が大であり、従って、第二の矛盾も解決どころか、逆に深まる結果を生むことになる。以上の如く、われわれは前提に對する二つの矛盾点を解決すべき手段は前提に従う限り、全く無いのである。

しかし、それ故、彼の前提さえ、さらに突き詰めるならその前提の前提(根拠)たる大前提—— $\wedge V$ は実在したV——さえ否定するならば、即ち、 $\wedge V$ は非実在(神話)であったVと新たに前提を設定するならば、彼の矛盾は一挙に取り除かれる。謂わば、われわれは、幻母たるVの束縛より解放され、 $\wedge B$ に対して、原点に帰った、自由な立場での解釈により、ヘーヴァジュラ系「根本」タントラ成立史上に於ける新たな位置づけが可能となったのであり、それは同時に、幻母自身の出生さえも明らかにすることに至るのである。では、以下に筆者の想定するA、B、そしてVの成立過程の大綱を示そう。

先ず、母タントラ史の起点(基点)に位置付けられる『Sat-

vabudhasamāyoga-tantra』(s・北京版 No. 8, 9) が、われわれの創定するハ母タントラ系六族形成期——ヘールカ族ならば『ヘールカ遊戲タントラ』(北京版 No. 463) を代表とするハ五族ヘールカ曼荼羅期——を経て成立する。次いで、これら六族は分派の傾向を現わし、各々独自の体系確立へと急速に進展していくのであるが、このようなハ六族展開期に在って、ヘールカ族に属するある集団は「ヘーヴァジュラ」と題する一大構想をまとめた。彼らの青写真に「よる」と、それは三十の枠組み——(1) rdo-rje-sñin-po-mnon-byan-chub (2) sgyu-ma (3) rdo-rje-gar (4) sna-tshogs (5) rdo-rje-stobs-po-che (6) mi-gYo-mgon (8) gzuns (6) mkhab-hgro-ma (12) ku-ru-ku-lle (13) bdul-ba (14) nam-par-snan-ndsad (15) dnos-grub (16) sgröl-ma (17) rdo-rje-phag-mo (18) gzi-brjid-che (19) bdag-med (20) gsin-rje-gsed (21) hñp-ndsad (22) dbyans-can (23) sbyin-bstreg (24) rab-gnas (25) dkyil-hkhor-chen-po (26) gtor-ma (27) sta-gon-gnas (28) mñon-par-rtogs-pa (29) phyag-rgya (30) byed-pa (31) glu (32) gar-gyi-dban-phyug (33) gar-gyi-dban-phyug——から構成され、S の六族を改組した五族・五仏を中心し、そこに配当された多くの諸尊の成就法をも含む、謂わば五族を総括的、且つ、平等に修習するハ五族総合タントラV、即ちVを作らんとするものであった。そしてその草案を整理したものがAなのである。但し、Aはそこに於いて、

Vは、既存のもの、という成立史を左右する重大な虚偽を敢えて提示する。これは恐らく自らの設計図の余りの壮大さに對するある種の危機感が惹起せしめたものであろうが、それ故、Aの成立は、Aとしての単独の經典の成立、であると同時に、後代に継承されるVの成立、即ち、ハ広本ヘーヴァジュラの神話Vの成立でもあったのである。だが、彼らはVの構想を断念した訳ではなく、偽りの言明とは逆にAに基づいて、着実に創作活動が続けていた。しかし、当時の思想史の推移は早く、大きな転換期にあり、その中で隆盛の兆候を見せ始めていた後のハヘールカ族タントラ安定期Vを支える要因となる新思想体系(上述の四灌頂等)に比して、最早彼らの創案は primitive ハ本源ではあるが旧式なV事態に陥っていたのである。そこで、急遽、彼らはAの一部に拠りながらも新思想を主軸にした先端的Bを完成させるのである、それもVの一部——二カルパという名目で……。そして、これによつて、VはB〔の第二カルパ〕を最後に、奇しくもその名「Mayakapa」の如く、幻と化してしまうのである。このようにBの成立は本来の構想からすれば離脱したものではあるが、実はこれこそが母タントラ系としての記念すべき独立にして、ヘーヴァジュラ系の実質的出发点であった、とも云えるのである。

(東洋大学大学院修了)